

「水の音原風景」プロジェクト

～次世代へ伝えるもの～

柴崎 勉

Written by
Tsutomu Sibasaki

「水の音」と「日本の音」

川のせせらぎ、波の音、雨音。水の音に感じるやすらぎ、この心地良さは何なのだろうか？
そんな単純な疑問と一人の尺八演奏家との出会いから、「水の音原風景」プロジェクトは始まった。

たまたま行ったある野外演奏会で聴いた田辺冽山氏の尺八の音色は、野外の自然と一体となった不思議な世界を生み出し、それまで和楽器に特に興味を持っていなかった自分にとって衝撃的な夜となった。風に揺れる木々、鳥のざわめき、星や月。和楽器の音色が自然とともに、美しく心に響いた。

この演奏会をきっかけに、和楽器や伝統音楽の世界に興味を持ち、何か水の問題にアプローチできないかと考えるようになった。ウォーターネットワークは、名前の通り「水のつながり」をテーマに、環境、文化、生活、産業、健康・福祉などの分野を超えて独自の視点から研究・活動を行っており、現代社会で見えにくくなっている「水のつながり」を再認識し、その大切さを理解

していただくための啓発活動なども行っている。この活動の一つとして、「水の音」と「日本の音」をテーマに何かできるのではないかと感じた。

豊かな水に恵まれた日本には、「水の音」や「水」を楽しむ文化が受け継がれている。地中に埋めた甕に響く水滴の音を楽しむ水琴窟や、水の流れを利用した鹿威し。日本の庭園には、水の音やその姿が欠かせない。実際の水がなくても、枯山水の庭では石や砂で、滝や川、大海までも表現してしまう。

日本の伝統文化や伝統音楽も日本の豊かな水によって育まれてきたと言える。豊かな雨が森を育み、日本の「木の文化」を生み出した。日本の伝統楽器も木の素材が使われている。

尺八は真竹、箏は桐、鼓は桜の木。竹林を吹き抜ける風の音を良しとする尺八のように、自然の素材から生まれた日本の伝統楽器は、その音色も自然の姿を映し出している。

「水の音」を自然の象徴として、その姿を「日本の音」で奏でる。失われつつある原風景を心に呼び覚まし、水や自然の大切さ、そして文化とのつながりを



豊かな雨が育んだ日本の楽器

感じてほしいと思った。こうして、水の音原風景プロジェクトがスタートした。

一九九六年、長瀬清流コンサート。中秋の名月となった当日、長瀬の岩畳と荒川を背景にした舞台が、月の光とかがり火に浮かび上がった。荒川上流の川のせせらぎ、虫の音とともに、尺八と箏、鼓によるオリジナル楽曲がえも言われぬ時空間を生み出した。その翌年、荒川の流れを辿る野外コンサートシリーズへとつながる。車社会になる前は、元々、川や海が交通や輸送の大切な道であり、その水のつながりを通じて文化も伝わっていた。現代社会では、水や川のつながりが見えなくなっている。自分が毎日の生活で使っている水道の水でさえ、どこから来て、使った水がどこへ行くのかも知らない。このプロジェクトでは、川のつながりや様々な水のつながりを辿り実施してきた。荒川流域では、上流から下流までを辿った。標高一〇〇メートルに位置する三峯神社の境内での荒川源流コンサート。源流の森に深い霧が立ち込める幻想的な舞台となった。荒川下流では、荒川の元々の最下流部である隅田川河口の豊洲埠頭で東京ウォーターフロントコンサートを実施した。

五感で聴く

このプロジェクトでは、単にコンサートで音楽を聴いてもらうだけではなく、様々な面から



荒川のせせらぎを聞きながら(1996年長瀬清流コンサート・リハーサル風景)

水のことを知り・体験できる要素を複合させてきた。子供たち向けの環境体験プログラムや和楽器体験、子供たちと一緒に音楽を創ることなど。「水の音」を象徴的なテーマとして、水と私たちが生命・生活・文化のあらゆる面で、いかに深いつながりを持っているかということとを多面的に感じてもらうためだ。

その体験のキーワードは、「五感」。自然の中で聴く水の音楽舞台はその日、その時間の天

候と自然とともに、二度と再現できない。一期一会のものとなる。そこでは、普段眠っている五感が呼び覚まされる。何気なく見過ごしていた音や香り、自然の息吹に気づく。

現代社会では、私たちの生活空間はどんどん自然から遠のいてきた。昔は、木造建ての家で窓ガラスも薄く、雨音や風の音がそのまま聞こえていたが、今では家の密閉性も高く外界から遮断されてきている。その生活は確かに快適であるが、何かを失ってきたことも忘れてはならない。自然から離れているということは、自然の一部である私たち自身の自然力＝生命力も衰えてしまうということにつながるがねない。

日本人は古来から、その繊細な感覚で独自の伝統技術と文化をつくりあげてきた。その背景には、仕事や暮らしが自然の営みと密接な関係にあったことをあげることが出来る。季節や気候、天気の変化に対する鋭い観察眼とともに、四季を愛で、自然を楽しむ心の豊かさを持ち、自然への畏敬の念やその恵みに対する真摯な感謝の気持ちも生まれた。日本の伝統的な染め物から生まれた繊細で美しい色文化からもそのことがうかがえる。水みづ、瓶びん、瓶頭びんかぶ、萌黄もえぎ、蘇芳すおう。伝統色に名づけられたこれらの美しい名前を見ても、先人たちが持っていた豊か

な感性に驚かざるをえない。

私たちは自然から、遠ざかるにしたがって、その感性も衰えてきているのではないだろうか。このプロジェクトが「五感」を呼び覚ますきっかけにもなればと考えている。

荒川流域からこのプロジェクトは国内外の様々な場所へと広がり、これまでの実施回数も三〇回を超えた。二〇〇一年には南米ツアーを実施し、世界三大瀑布の一つであるイグアスの滝でのデモンストレーションをスタートに、パラナ川、ラ・プラタ川と国境を超えた水のつながりをテーマに四ヶ国七ヶ所での公演を行った。そして、二〇〇三年三月、日本で開催された第三回世界水フォーラムでは、ユネスコの主催する「水と文化の多様性」分科会のオープニングで、「水の音原風景」プロジェクトのプレゼンテーションを行った。

水の音は、命の響き

今、都市空間に再び水音が響き始めている。大規模な再開発エリアや商業施設のパブリックスペースには、積極的に水を利用した空間が配置されてきている。水の流れや様々な水の動きを利用し、そこには、心地良い水音が響いている。都市に埋めてしまった川を復元しようという動きも見られる。二〇〇五年、韓国ソウル中心部で行われている清溪川復元事業



南米・イグアスの滝でのデモンストレーション(尺八・田辺洌山氏、2001年9月、ブラジル)

が完成する。コンクリートで蓋がかけられソウル都心の交通の犠牲となっていた川が、再び、水音を響かせてくれることになる。「水の音原風景」プロジェクトも、この完成年を記念し、二〇〇五年三月に韓国・ソウルでの実施を計画している。国内でも、東京・渋谷川の復元の動きなども見られる。「春の小川」のモデルともなった渋谷川。東京の真ん中で、再び「さらさら」と流れる水音を聴かせてくれる日を楽



熊本・阿蘇の名水、菊池溪谷(2004年10月「水の音原風景」阿蘇プロジェクトでは、菊池川の水の流れを辿った)

しみにしたい。

改めて、人はなぜ水辺に憩い、水の音を心地良いと感じるのだろうか。

それは生きる本能であるとともに、私たちのDNAに刻まれた記憶によるものではないだろうか。私たちは水から生まれ、水によって命が成り立っている。四大文明の時から人々は川のほとりに住み、飲み水や生活の水を確保してきた。水が存在するということは、自分の生命を維持する上での安心感を生むことになる。そして、水の音がするということは、水がよどんでいないということだ。よどみは水を腐らせ、その水を頼る生き物の命の危機ともなる。さらに言えば、滝やせせらぎなど水音の響く場所ではマイナスイオンが多く発生し、清涼な空気が私たちを心身ともに癒してくれる。

私たちは、母親のお腹の中、羊水の中で「水の音」を聴いていた。

「水の音」は命の響きであり、失われゆく水と音を次世代へ伝えてゆきたい。

「水の音原風景」コンサートはこのように語りでフィナーレを迎える。

水の音が聴こえる地域社会、都市空間は、

私たちの五感、そして生命力を磨いてくれる。そして、その水がすべての命をつないでいることも教えてくれる。

「水危機の世紀」と呼ばれる21世紀。街を流れる水、私たちの使っている水、飲んでい
る水。これらの水は地球の生命すべての共有
財産であり、きれいな水が飲めなくて亡くな
っていく、たくさんの子供たちが世界中にいる
ことも、我々は忘れてはならない。

CEL

* 「水の音原風景」プロジェクトについて
<http://www.waternetwork.org>を参照のこと。
同プロジェクトは、二〇〇三年日本水大賞
(日本水大賞顕彰制度委員会)の「審査部会
特別賞」を受賞した。

□ 柴崎 勉(しばさき・つとむ)

ウォーターネットワーク代表。一九六一年生まれ、埼玉県出身。早稲田大学・第一文学部卒業後、株式会社服部セイコーに入社し海外営業担当の他、新規事業開発を手がける。退社後、商業施設開発、地域計画や地域振興計画などの企画立案、企業の新規事業開発、企業・行政の広報イベントなど幅広いプロデュースとコンサルティングを行う。

